

平成二十六年元旦

初詣赤児の泣き声天高く

父の腕に大泣きの声初詣

昼酒寝正月

食積（くいつみ）や父過ごし寝る金粉酒

一月三日、強風のアクアライン

渋滞の列に北風波頭

スーパーも模様替え

松過ぎの売り場一新豆と面

姉より消防士の息子が出初式でテレビに映ると知らせ

出初式梯子極みに我が息子

ベランダに雀来る

動き止め息潜め見る寒雀

神奈川工科大学の講義始め

大山の肩から覗く雪の富士

マフラーとマスク外せと初講義

小田急

枯れ草や土手にボートの甲羅干し

日溜まりを探して立ちぬ冬の駅

大寒波

大山の暗雲纏ふ大寒波

相模野に風花舞ふ日背ナ伸びよ

丹沢も雪降りあれば些と凄し

バスを待つ列の静けさ冬の暮

声高に鍋の相談冬のバス

一月十三日 横浜アリーナ 成人式

日溜まりの百花繚乱成人式

日当りて動き輝く新成人

一月一五日 雪の予報も降らず

雪降ると懸念の挨拶曇り空

一月十八日 百合生誕百年 雪の予報

今日もまた雪の予報とご挨拶

一月二十日 大寒 快晴寒い日

大寒と確と認めつ家路かな

大倉山梅園

母と子 初めての春を待つ風情

しら梅を指す母に伸ぶ赤児の手

三桮（みつまた）の冬芽や花の色問われ

東横線多摩川鉄橋

川面に春満ち光る詩の如く

一月二十三日 ペンクラブ新年会 ゲストを駅に送る
新年会著名な客と帰途に就き

大倉山梅園、まだ咲き始めの梅の下で

梅蕾爺婆三人小宴会

白梅や鳥の影三つ忙しき

一月二十六日 暖気 東京の最低気温一二、五度

半袖をこれ見よがしに一家行く

一月二十九日 熱海合宿

早川―根府川間海が迫る

みかん山越へて車窓に海光り

二月四日 立春 出がけ小雨

渋谷駅前ののビルの温度計一三〇八時に二度 小雨
午後四時ころから雪、五時ころにはかなり激しい雪

立春や天の手紙をたなごころ

二月八日 雨、夜半に雪に変わる

春の雨来て蕎麦掻きを食ふてをり

馥郁の香り閉じ込め春の雨

残雪

門々に雪だるまある建国祭

還暦の妻女の雛を飾りけり

薄白く濁れる椀やしじみ汁

一月一四日 大雪 甲府に一一四センチ観測史上最高

孟宗の地に撓りゐる春の雪

春雪の三尺兄の便りかな

四月二十五日 結婚記念日

父「お前の結婚式の時には松の花がきれいだった」

外苑に松の穂立ちて記念の日

旭市行部岬

岳父と立つ岬の風や卯波立つ

圏央道茂原付近開通する

花桐の根元は見せず屹立す

大倉山

こでまりの揺れて空家の草の叢

見下ろせば野菜にも似て楠若葉

初つばめ工事現場をかすめ飛び

御殿場 秩父宮記念公園

宮様の枝垂れの桜一片も散らず

宮様の想ひ覆ふや糸桜

東山湖脇のレストラン

陽光やしらすパスタの塩加減

五月一七日朝、快晴 富士山に地肌

五月来る富士山肌に斑見ゆ

神奈川工科大学、お洒落な理系女子学生闊歩

口紅をきりりと引きて新入生

五月二十四日 白河 快晴

二十日に急死せし和田喜代志君葬儀

薰風の黄泉まで渡れ野辺送り

大倉山散歩

薔薇さかんどろぞお撮りと老女笑み

一羽だけ騒ぐつばくろ梅雨の入り

梅雨空に打者強振のサイン受く

夏の風邪七度一分の憂鬱さ

夏風邪をうつせしと妻重き咳

いつの間に朱色の差して花柘榴

裾野山荘

抜くも切るも手が避け過ぎる半夏生

老鶯の節回し冴ゆ杉木立

振子花の抜かれずにゐる青芝生

箱根

樹海濃し白散らしたる山法師

梅雨空やコーヒー豆を変えてみむ

代々木 参宮橋からの歩道橋

眼の下に泰山木花群れのあり

追い付きて肩並べ聞く蝉の声

上野公園 毎日書道展、姉の書を見に行く

大道芸木陰へ声張る日の盛り

七月二十日 小学校同級会 南下条

同級会片蔭辿る故き道

旭 七月二十六日朝 濃い霧

深き霧晴れて白シャツ翻り

爽やかな夏の朝

みんなの声のあちこち朝の空

横浜港で花火

強風や夜の空澄み花火冴ゆ

八月六日 物凄く暑い日

主亡き犬舎影濃き原爆忌

大倉山

馬追いにせかさ家路千鳥足

蟻螂の頭かしげて斧を上ぐ

葛の花絡みつきたる防災庫

旭

桃売りに父出て値切る声のして

太尾緑道 風に揉まれると落ち葉でなくとも香る

風巻いて桂の落ち葉香り濃く

駅への道の途中、丹精の朝顔あり

訊ねたところ、特に高さを意図してはいない

朝顔の花の高さの揃いをり

裾野山荘

野分来る箱根八里は霧流れ

直売所の西瓜、中が赤くなかったら交換という条件

畠にて購ふ西瓜保証なし

庭の山椒の木に実が鈴生り

自生せし山椒赤き実の成りて

久しぶりのバーベキュー

バーベキュー炭より先の蚊遣焚く

何だかなまめかしい色の花

白花は素肌の色の曼珠沙華

郁の農園発送で葡萄到来、一種一房で葡萄

従姉より八種の葡萄到来す

旭 朝風爽やかな朝散歩、土屋邸でジュース

木犀の町内送り朝の風

太尾緑道の習慣

椎の実を枝の雀に踏み砕き

その名をば試すとて折る猫じやらし
一

十月二十九日鎌倉吟行 快晴無風

大巧寺

庭隅を埋づめ尽くして時鳥草

妙本寺 比企一族の墓 一幡の袖を思う

山茶花や墓石におもふ袖の色

鶴岡八幡宮 快晴で大変な人出、七五三
若い美しい母

七五三晴れ着の手引く母若し

石段を掃く袴裾七五三

源平の池

破れ蓮写して揺れず池面かな

秋になった実感

遠富士や空一面の鰯雲

鰯雲吹奏楽の流れきし

旭

干潟八万石の水田広がる中を散歩

穂穂（ひこばえ）のうつろに揺るる朝まだき

散歩の途中、ジュース目当ての土屋の庭

庭先に来るしよびたき桑木枯る

袋みかんという小粒のみかんを収穫する

みかん剪る隠れし棘に手傷負ひ

大倉山

刈込みて威厳を正す冬木立

山茶花の花や頭上に足許に

東京代々木公園、葉を落とした向こうに意外な景色

冬木立透きて景色の新しき